

白人労働者階級児童・生徒の教育上のディスアドバンテージ問題への取り組みに関する一考察

清田夏代（実践女子大学）

10年ほど前に書いた論考のなかで、『エコノミスト』誌の2005年の記事「忘れられたアンダークラス」について言及した。その記事では移民たちについては救済すべき社会的弱者として、そして社会統合の対象として注目を集めるようになっていく一方で、白人貧困層の学業成績が他のエスニックグループと比較してもさらに劣悪であり、仕事に就く際にも困難な状況に置かれているという実態が示されていた。彼らが移民に対するヘイトの温床になっており、移民に対する嫌悪と排斥を声高に叫ぶ極右勢力と結びつきやすい傾向にあることもすでに認識されている。

労働者階級の文化と社会的な拠点を徹底的に破壊したのは、サッチャーであるといわれている。サッチャーによる新自由主義改革のプロセスにおいては労働組合が改革の障壁とみなされ、ことごとく解体されてきた。そうしたなかで労働者階級の社会的な価値も解体され、白人労働者階級＝白人貧困層の図式が成立するまでになっている。

ジャーナリストのオーウェン・ジョーンズの世界的な注目を集めた2011年の著書『チャヴ』によれば、サッチャー政権は「階級について話すことを徹底的に避け」ていたという（p.64）。すなわち、社会の構造とその不正、歪みの結果として生み出されるものとして説明されてきた「階級」という考えは、社会的な成功も失敗も個人の自助努力の結果であり、失敗の責任もまた個人に帰するという考えに基づいた新自由主義改革とは相容れないものであった。こうして80年代の保守党政治において「階級」とそれに対する挑戦が無視されるようになる一方で、左派もまたその政治闘争の対象をアイデンティティ・ポリティクスに向け（Jones 315）、深刻な衰退に陥った白人労働者階級の問題は政治的空白に置かれるようになったのである。

状況がこのように進展していたなか、「忘れられた」人々の問題への注目がなされる。2014-2015年の庶民院教育委員会報告書『白人労働者階級の児童の学業不振（*Underachievement in Education by White Working Class Children*）』においては、貧困層の児童の学業成績、環境、他の民族との比較等がデータを用いてなされ、対応についての勧告がなされている。そこでは、教師を配置することや親がもっとコミットすることなどに加え、格差を縮めるためのピューピル・プレミアムのような施策の実施が歓迎されている。さらに、2021-22年には新たに『忘れられた若者たち：白人労働者階級の児童はいかに見捨てられてきたか、それをどのように変えるか』という報告書を刊行し、この報告書への応答として政府が政策文書を刊行している。本研究においては、これらの報告書および政府による応答を検討し、これらの取り組みの背景となっている問題意識を明らかにし、これらの対策がこの政治問題に根底から取り組むものとなっているかを検証を始める第一歩としたい。